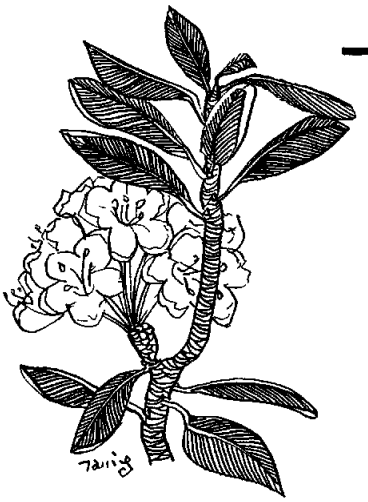

緑と学園

八木　健三

札幌の南の郊外・下藤野に建設予定の高等学校の敷地をめくって、いま附近の住民と教育庁の間に一つの問題がおこっている。リュージュ・コースのある三角山の麓、下藤野団地の南側には、幅三五〇m、奥行一六〇mくらいにわたってエルム、コフシ、イタヤ、ミズナラ、シラカバなどの混しった自然林が残されている。春はコフシの白い花が咲き、秋はコクワやヤマブドウが実り、キノコ狩もできるこの林は、附近の人びとにとって貴重な自然公園であった。

ところが最近この林を伐採して、道立高校を建設するという青写真がはじめて明らかにされ、寝耳に水と驚いた住民が高校建設そのものに反対はないが、なんとかかけがえのないこの自然林は残してほしいと要望した。これに対し、教育庁の方は隣接地所の入手困難を理由に、自然林伐採の既定方針を変えず、五十四年度開校に間に合わせるように早期着工の構えをくずしていないので、交渉は難航している。かねて札幌周辺の緑地が失われつつあるのを憂えていた本協会としても、この事態を重視し「都市問題特別委員会」が中心となり、両者の間に立って、なんとかこの自然林を残す方向で問題を解決したいと努力を重ねているところである。

せっかく見事に茂っている林を切り倒し、凹凸の地形をブルドーサーでシャニムニ平らに整地し、その上に建物を建て、申しわけのようにまわりに苗木を植えるという従来の方法はもう清算し、自然と建築物が見事な調和を見せる方式へと転換すべきときであろう。

亭々と聳えるエルムの梢を研究室の窓ごしに眺めるたびに、この見事な林を残してキャンパスをつくった北大創設の人びとの先見の明に、私は深い感銘を覚えずにはおられない。豊かな自然の中にある学園で、はじめて全人格的な教育が可能になるのではないか。学校の周辺に残された林の中に、生徒諸君は植物を学び、動物を知り、自然を愛するようになるだろう。やがて彼らが母校を離れたときも、その心の片隅にはこの自然林の姿が永く残されるであろう。

もっとも自然を愛するように考えられていた日本人が、しつは現在もっとも自然を破壊して顧みないという情ない実情にこの辺でピリオドを打ちたいものである。自然と美事に調和した建築物をつくるのは、それなりにかなり困難なことではあろうが、努力と経費を惜まなければ不可能ではない。森林の保全度は一国の文化水準のバロメーターともいわれている現在、下藤野に建てられる高校がその美事なテスト・ケースとなることを心から希望したい。（副会長）